

カモと七夕考

市 忠顕

(1) 万葉集の七夕のうた

万葉集には「巻第十の秋の雑歌」^{ざふか}を中心に、七夕の歌が沢山あるが、ここではその内、「はた」(機、服)または、「たなばたつめ」(織女)が出てくるものを挙げてみた。(文献1)

2019 いにしへゆ挙げてし^{はた}機も顧みず 天の川津に年ぞ経にける

2027 わがためと^{たなばたつめ}織女 のその宿に織る白たへは織りてけむかも

2028 君に会はず 久しき時ゆ織る^{はた}服の ^{しろたへごろも}白袴衣 垢づくまでに

2029 天の川^{かち と}楫の音聞こゆ 彦星と^{たなばたつめ}織女 と今夜会ふらしも

2032 ^{ひととせ なぬかのよ}一年に七夕のみ会ふ人の恋も過ぎねば夜はふけゆくも
一に云はく、

^{ひととせ なぬかのよ}一年に七夕のみ会ふ人の恋も尽きねばさ夜ぞあけにける

2034 ^{たなばた いははた}織女の五百機立てて織る布の 秋さり衣 誰か取り見む

2040 彦星と^{たなばたつめ}織女 と今夜会ふ ^{かはと}天の川門に波立つなゆめ

2041 秋風の吹きただよはず白雲は^{たなばたつめ}織女 の天つ領巾^{ひれ}かも

2062 ^{はたもの}機の踏み木持ち行きて天の川 打橋わたす君が来むため

2063 天の川霧立ち上る^{のぼ たなばた}織女の雲の衣のかへる袖かも

2064 いにしへに織りてしはた機をこの夕衣ゆふべに縫ひて君待つわれを

2065 足玉も手玉もゆらに織るはた機を 君が御衣みけしに縫ひあへむかも

2080 織女たなばたの今夜会こよひひなば 常のごと明日を隔てて年は長けむ

2081 天の川 棚橋わたせ たなばた織女の い渡らさむに 棚橋わたせ

あまのがわ天漢 わたせ棚橋渡 たなばた織女之 わたら伊渡左牟尔 わたせ棚橋渡

万葉集には七夕の歌が 132 首もあるが、七月七日の夜（七夕）、牽牛と織女の二星が天の川を渡って会うという中国伝来の伝説による歌がほとんどである。しかしこうした外来の行事や文化がわが国に定着したということは、それが定着するだけの素地が当時のわが国にあったからだと考えられる。次に、古語拾遺の「日神の石窟幽居の段」を見てみよう。

(2) 『古語拾遺』の「日神の石窟幽居」の段（文献3）

ながしらはのかみ長白羽神〔伊勢国の麻をみ統よが祖なり。今の俗いふくに、衣服しらを白羽と謂ふは、此ことのもとの縁

なり。〕をして麻うを種あをにきてゑて、青和幣〔古語にきてに、爾伎豆といふ。〕と為さしむ。

あめのひわしのかみ天日鷲神 と津つくひみのかみ咋見神とをして穀かぢの木うを種しらにきて殖ゆふゑて、白和幣〔是は、木綿かみなり。已上

の二つの物（麻と穀）は一夜おひしげに蕃茂あめのはづちをのかみれり。〕を作らしむ。天羽槌雄神〔倭文しどりが

遠祖なり。〕をして文布しつを織らしむ。天棚機あめのたなばたつひめのかみ姫神 をして神衣かむみそを織らしむ。所

にきたへ謂和衣〔古語たへに、爾伎多倍といふ。〕なり。

令長白羽神〔伊勢国麻績祖。今俗、衣服謂之白羽、此縁也。〕種麻、以為青和幣。〔古語、爾伎豆。〕令天日鷲神与津咋見神穀木種殖之、以作白和幣。〔是木綿也。已上二物、一夜蕃茂也。〕令天羽槌雄神〔倭文遠祖也。〕織文布。令天棚機姫神織神衣。所謂和衣。〔古語、爾伎多倍。〕

ここに、『天棚機姫神あめのたなばたつひめのかみをして神衣かむみそを織らしむ。所謂和衣にきたへなり。』という下りがある。棚機と書いてタナバタと読ませている。

一般に、七夕（七日の夕の意味）と書いてタナバタと読むが、中国の『七夕』が日本に入ってくるまでに、日本に『タナバタ』と呼ばれるものがあって、それと重なって、今日の七夕たなばたが存在していると考えられる。では日本古来のタナバタとはなにであったのであろうか？

タナバタは「タナ+ハタ」であろう。そして「ハタ」が「機」であるのは異論のないところであろう。では「タナ」とはなにか？ 「棚」を充てるのが一般的であろう。では「棚機」の「棚」は何を意味するのか。よく言われているのは『棚板おりきの上に置いた織機』である。

水辺で神衣を織りながら、神の来迎を待つ織り姫をタナバタツメ（タナバタの女、上記の『古語拾遺』の天棚機姫神参照）というが、この姫が「棚（板）に載せた織機」で機を織ったので、タナバタツメというとの説がある。しかしこの「棚に載せた織機」は不自然である。

一方、織機の歴史を考えると、初は機台（後代の織機（地機や高機*）は機台上に組まれている。）のない極簡単なものだったのは間違いのないところであろう。それが発達して機台の付いた「織り機」と呼ばれるものに進化したと考えられる。この『機台のついた機織りの道具』を『棚機』と呼んだのではないか。これが一の考え方である。（例えば平林章仁、文献6）しかしこの考えでは「機織り機はたきの発達のある段階のものたなばた」を棚機と呼んだことになり、『タナバタ』が一般的な概念を表す響きがあるのと比べ、やや齟齬を感じる。（*地機や高機については、文献6の138頁の図等を参照のこと）

「棚機」のもう一つの解釈として^{むしろばた}筵機（筵を織るための機、例えば文献7の96頁の挿絵参照）のような^{たて}「縦織りの機」（織りあがった部分が縦（下）に進行する）に対する『横織りの機』（現在の織機のように、織れあがった部分（則ち布になった部分）が水平（手前）に進行する）の考えは如何であろうか？ 棚機を「棚のように横にのびた機」と解するのである。この場合は機台が付いていてもいなくてもいいので、第一の考えよりもより一般的な概念となる。つまり^{たてばた}縦機でなく^{よこばた}横機（これが普通である）の意味である。

第三の考えは^た『手な機』である。つまり現在のような「機械の織機」ではなく^{てばた}簡単な手機、すなわち『手織りの機』と解するのである。これが最も一般的な概念ではないか。この解釈では『タナバタ』は『手織りの機』、『タナバタツメ』は『手織りの機を織る女人』^{にょにん}の意味で、特に^{てばた}手機で^{かむみそ}神衣を織りながら^{おりひめ}神の現れを待つ織女（天棚機姫神）ということになる。この「^{たなばたつめ}水辺の織女」と「天の川の側の織女星」のイメージが重なって「現代の七夕」に繋がったのであろう。

(3) ^{あめのたなばたつめのかみ}天棚機姫神 と ^{したてる}葛木鴨の高姫（下照比売）

大和葛木の^{たかがも}高鴨神社（^{たかがもにますあぢすきたかひこねのみこと}高鴨坐味耜高彦根命神社）には^{たかがも}味耜高彦根神と共にその妹神の^{したてる}高姫（下照比売）も祀られている。高姫は謂うまでもなく高彦（根）と対である。古事記に高姫（高比売、別名下照比売）が兄の高彦（味耜高日子根）を称えて歌った次の有名な歌謡がある。（文献4と5）

天なるや ^{おとたなばた}弟棚機の ^{うな}項がせる

みすまる 玉の御統 みすまるに あなたま 穴玉はや

ふたわた 美谷 二渡らす

あぢしき 阿治志貴 たかひこね 高日子根の神そ

阿米那流夜 淤登多那婆多能 宇那賀世流
多麻能美須麻流 美須麻流邇 阿那陀麻波夜
美多邇 布多和多良須
阿治志貴 多迦比古泥能迦微曾也

ここに出てくる弟棚機おとたなばたは若くて美しい棚機女たなばたつめのことである。この歌を歌った下

照比売しどり（高姫）が伯耆国一宮の倭文神社（式内社、鳥取県東伯郡東郷町宮内）

に倭文部の祖神しどりの天羽槌雄神あまのはづちをのかみ（建葉槌命たてはづちのみこと）とともに祀られており、現代ではむしろ、こちらの神（下照比売）の方が（安産の神としてではあるが）有名になっている。この下照比売（高姫）は元々は天羽槌雄神の対としての天棚機姫神（上記『古語拾遺』参照）として祀られていたものと推察される。そこで、高姫（下照比売）＝天棚機姫の構図がうかがえる。高姫（下照比売）は元々葛

木の鴨の神であるし、美作みまさかの倭文神社しどりは賀茂競馬料の筆頭荘園としての倭文庄しどりのしょう（現在の岡山県久米郡久米町の内）の主たる神社であり、カモ族と関係が深い。

また葛木には倭文氏の奉斎する葛木倭文坐天羽雷命神社かつらぎのしどりにますあめはづちのみこと（略称葛木倭文神しどり

社）があり、上記の「オトタナバタの歌物語」も、葛木の倭文氏しどりによって伝承されたとされる。（文献6の第6章「オトタナバタ考」、第7章「葛木倭文神社考」を参照の事）これらより、古代の葛木地方におけるカモ氏と倭文氏の深い交流が想定される。このように見てくると、鴨の神・高姫（下照比売）には

^{たなばたつひめ}
「棚機姫（＝織姫）としての性格」が色濃くあるようである。

(4) 京都の賀茂社と七夕神事

京都の上賀茂神社では現在、五月五日や九月九日の節句に神事が行われているが、七月七日には神事が無く、七夕の神事は伝わっていないかのようにみえる。上賀茂神社では九月九日の重用の節句の神事として現在「烏相撲」が行われている。しかし、相撲は「七夕の行事」と縁が深いようである（文献6）。相撲

は「^{すまひ}素舞を舞う」意味の「^{すまふ}すまふ」（^{すま}素舞ふ）からきているというのが通説と

なっている。^{すまひ}素舞とは「素裸の舞」のことであろう。モンゴル相撲では勝者が勝負の後、「勝利の踊り」を踊る姿がテレビで報道されている。日本の相撲でも古代には「勝利のダンス」をしたのであろう。それが素舞だ。五月五日の競馬会神事でも、競馬の終わった後で、勝った方（右方か左方）の舞楽（右方舞か左方舞）が舞われたという。

現在の七月は真夏であるが、旧暦の七月は秋である。したがって、相撲は「秋の季語」（勿論七夕も秋の季語）なのである。もともと七月七日に行われていた相撲の神事が、いつしか九月九日に行われるように変わってしまったのではないか。この点については、現在の所、単に推測の域を出ていないので、さらに調査、研究がなされねば成らないだろう。

参考文献

- (1) 桜井満訳注、『万葉集（上、中、下）』、旺文社（旺文社文庫）
- (2) 折口信夫、『万葉集辞典』、中央公論社（折口信夫全集第六巻）
- (3) 斎部広成撰、西宮一民校注、『古語拾遺』、岩波書店（岩波文庫）
- (4) 武田祐吉訳注、中村啓信補訂・解説、『新訂古事記』、角川書店（角川日本古典文庫）
- (5) 土橋寛、小西甚一校注、『古代歌謡集』、岩波書店（日本古典文学大系3）
- (6) 平林章仁、『七夕と相撲の古代史』、白水社
- (7) 知里真志保、『地名アイヌ語小辞典』、北海道出版企画センター